

博士（学術）学位申請論文概要書

西鶴作品研究  
— 表現と享受の諸問題 —

南陽子

本博士論文は井原西鶴の散文作品を中心に、初期の好色物から武家物、町人物、没後に出版された遺稿作品までの主要な作品集について、従来の西鶴研究で提示されてきたそれぞれの問題点を踏まえ、作品個々の表現・文体と、既存の解釈を形成してきた享受史の側面から各話の作品論を展開し、作者と作品の位置付けと、その評価の再考を図るものである。

現在の西鶴研究は、作品間の影響関係を検討する典拠研究と、遺稿集の成稿過程を復元する成立論が主流を占めている。この二つの方法は、現存する限られた資料をもとに作者の創作意識を推定するという制約のために、個々の作品の「読み」の問題に言及することが難しかった。加えて西鶴作品の内容理解は、昭和初期の自然主義文学者らが影響力の強い西鶴像を提示して以来、悲劇作家としての西鶴、もしくは喜劇作家としての西鶴という、相反する作者像が混在しており、一つの作品の内容理解が一つの観点に導かれない長い膠着状態にある。

本博士論文では、こうした西鶴研究の課題を克服するうえで、個々のテキストにおける表現面が、作品内部でどのような働きを担い、それを受容する読者に対して何を伝達することが意図されているのかを、作品の史的背景や他作品との関連性、文脈上の必然性と物語としての作為などを広く加味しながら推定し、従来の作品解釈の読み換えを図っている。本論考がこうした方法論を採用するのは、西鶴の作品が一つの話の中に複数の話題を取り込み、相反する価値意識を取り合わせるといった特徴を持ち、その表現方法には作者の談林俳諧師という来歴が反映されているためである。

こうした「俳諧的文体」と呼ばれる西鶴の散文を論じるうえで、本論考では作品内容を「作者」個人の思想性の問題、創作意図の問題に帰着させることを避け、テキストを評価する基準となる読者による享受の問題を見直し、作品を構成する可能な限り多くの要素を総覧したうえで、作品の全体像を再構築することを目標としている。以下に、各章における作品ごとの問題点と方法論をまとめる。

## 第一部 西鶴生前作品

### 「一、西鶴好色物研究」

『好色一代女』は、『徒然草』、『遊仙窟』、小町物、謡曲類を中心に、最も多く典拠探索が試みられている作品の一つである。西鶴作品における典拠研究の課題は、先行作品との断片的な言辞や設定の一致が、多作品に渡って確認できる一方で、そのうち特定の作品との影響関係を限定して掘り下げることができない、つまり両者の類似点には直接的な剽窃関係や、単純なイメージの踏襲が見られないため、典拠を指摘することが西鶴作品の内容理解に必ずしも結び付かないという点にある。

本論考では『好色一代女』巻一の一「老女隠家」の前半部における一代女登場までの場面を中心に、一代女という主人公がどのように形象されていたのかを、第一章「『一代女』典拠利用に関する一考察」では好色庵に至るまでの道程の描写と『徒然草』の関係から、第二章「『一代女』における一代女像の形象」では一代女合奏の場面と『遊仙窟』の関係においてそれぞれ考察を加えた。従来の典拠研究では、一代女の草庵の描写が『徒然草』『遊仙窟』における隠者像を踏まえていることが指摘されていたが、厳密に検討するとこれらの先行作品は『好色一代女』のテキストと同一の言辞を持たず、設定も完全に類似するものではない。『一代女』が踏襲しているのは、すでに類型化された隠者のイメージ一般であり、このイメージを反復させ、踏襲の方法に変化を加えることで、中世的な隠者像を「近世的隠者」に変容させることがテキストの主たる目的とされているのである。

この方法は同年に刊行された『好色五人女』巻五においてすでに試みられており、またその後の諸作品においても同様の隠者像は複数に渡って確認できる。近世的隠者としての一代女像は、『好色一代女』本編である巻一の後半から巻六の四までの昔語りの部分を理解するうえでも重要な位置を占めている。『好色一代女』は従来、一

代女の語る伝記部分の悲劇的展開を重視して読む立場と、仮名草子以来の風俗誌としての性格を重視して喜劇として読む立場に分かれるが、「一代女」という主人公が俗出家への揶揄と笑いを基調とする近世的隠者として設定されているならば、その昔話りの位置づけもまた、おのずと規定されるのである。

本論考では『好色一代女』巻一の後半から巻六の四に及ぶ昔語り部分を位置付けるに当たり、『好色一代女』の挿絵におけるモチーフと本文の関係性を、第三章『「一代女」の挿絵と本文』において総攬し、巻二の三から巻六の二に及ぶ風俗誌的章群と、巻一、巻二前半、巻六後半のストーリー主導の章群について、先行する仮名草子や他の西鶴作品の挿絵と本文にそれぞれを適宜比較しながら概略的に考察した。

この問題点は、続く第四章『「一代女」の受容と創造』において、『好色一代女』の自然主義的理解が完成された昭和初期における西鶴受容の分析から再度考察を加えている。『好色一代女』享受の例として研究分野の他に広く一般への影響力が大きかったものに、溝口健二の映画『西鶴一代女』を挙げることができる。溝口の『西鶴一代女』は、原案である西鶴の『好色一代女』を「近代劇」として意図的に読み換え、映画製作当時の観客層を意識することで成立した翻案作品である。本論考では映画『西鶴一代女』の各場面に採り入れられた原案の『好色一代女』各章を整理し、その選択の意図と全体の構成を考察することで、『好色一代女』を「女の一生」として読み、伝記としての性格を強調してきた従来の『好色一代女』理解を相対的に把握することを試みたものである。

付論として、『好色五人女』の研究史概説と、『好色一代男』『西鶴諸国はなし』をはじめとする諸作品の挿絵を対象とした享受論を付す。第一章『「好色五人女」研究史』は、先行研究が問題としてきた悲劇と喜劇、趣向とストーリーといった論点を各巻ごとに整理し、『好色五人女』作品論のための今後の布石とするものである。また、第二章「絵の時間と物語の時間」では、「時間」を表象する挿絵と、その本文における表現上の効果を検証したものであり、ストーリーにおける時間の概念を、それを享受する読者の問題とともに考察する。『好色一代女』における各挿話とストーリーの関係性などを考察するうえで、これを敷衍させて論じることを今後の課題としている。

## 「二、西鶴武家物研究」

西鶴の創作歴において、散文作品が最も多作された貞享三年から五年（元禄一）にかけて、一連のテーマで書かれた作品群に『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』の武家物作品がある。これら武家物作品は、題名と序文に掲げられた明確なテーマ性に反して、個々の話の作品内容がしばしば矛盾する点が主要な問題点とされ、議論の重ねられてきた作品群である。

本論考は、従来の武家物理解が、話を評価する基準として武家物作品を律するテーマの一貫性を重視してきたのに対し、個々の話の表現面を含む物語性の問題を検討することで、武家物作品の再評価を試みるものである。

**第一章「西鶴武家物における序文と作品」**では、序文に掲げられた「敵討」と「義理」のテーマの問題を確認したのち、『武道伝来記』巻一の一における「敵討」の描かれ方と一話全体の構成を、文体の変化を中心に考察して、そこに意図された表現上の効果が想定されることを指摘した。巻一の一は全体に占める「敵討」の描写部分が極端に少なく、テーマ性の低さが難じられてきた話であるが、表現の不統一と見られる前後半の文体の変化と叙述の量の不均衡は、一話を全体の流れの中で読んだとき、作品内容に即して文体に緩急をつけ、物語上の効果を高めるという作者の創意であった可能性が想定できるのである。本論考はこうした表現上の特徴に着目することによって、作者の意図する話の主眼が「武道」や「義理」といった観念論ではなく、一話の物語性そのものにあることを検討したものである。

さらに**第二章『武家義理物語』巻三の三における「義理」と「主命」**では、従来は劣作とみなされてきた『武家義理物語』巻三の三を題材として、作品内容と序文との齟齬の問題を検討するものである。巻三の三は、話の主要人物である「中小姓」が雑言を理由に同朋を討つという筋立てに『武家義理』序文との矛盾が指摘されてい

るが、本論考では話中で使われる「具足」の文脈上の意味を歴史的観点と文芸的観点から検討し直すことで、巻三の三の異なる解釈を提示し、序文に矛盾するとされる「義理」の意味の再定義を図っている。「西鶴の創作意識」を基軸とした作品内容の理解は、個々の話の物語としての解釈に大きな制約を加えるものであった。西鶴武家物研究では、今後、表現面を含めた作品内容における広い物語性の探求が求められるのである。

### 「三、西鶴町人物研究」

西鶴の散文作品において、表現面での最も大きな課題は「俳諧的文体」の理解である。俳諧的散文の第一の例は『好色一代男』を筆頭とする好色物の作品群であるが、雅文脈を多く取り込んだ初期の好色物に対し、中期から晩年に刊行された『日本永代蔵』『世間胸算用』の町人物は、俗文脈の取り込みという点で、他の作品に比べてより高い俳諧性が確認される作品集である。第一章「西鶴町人物の文体」では、その顕著な傾向として、西鶴町人物の文中における「ことわざ表現」の引用の方法を考察した。西鶴に先行する仮名草子類では、ことわざは成句の形のまま引用され、話に教訓性を加味するという役割を担っている。一方で西鶴の町人物における「ことわざ」の使われ方には、成句であることわざの一部がもじられ、作品中の文脈に応じてその慣用的意味を変化させるといふ引用の方法が複数例に渡って指摘できるのである。西鶴作品における引用の方法が、作品内容に及ぼす作用は、雅文脈、俗文脈の別を問わず、内容理解のうえで大きな意義を持つものであり、今後、表現面からの西鶴作品の更なる探求が課題とされるのである。

## 第二部 西鶴遺稿作品

西鶴没後に刊行された遺稿作品は、版面の乱れ、文章の不整合など諸々の問題点を含むことから、作品の成立過程を検討する成立論が研究の主体とされてきた。なかでも第一遺稿集である『西鶴置土産』は、編集過程の混乱と作品集全体のテーマ性の希薄さが問題とされ、北条団水をはじめとする弟子の関与を如何に把握するかという点で議論の紛糾してきた作品集である。

本論考では第一章『西鶴置土産』における評価と作品』において、「枯淡」「達観の境地」などと形容されてきた『西鶴置土産』という作品集全体の従来の理解が、明治時代後期から昭和初期にかけて形成された自然主義文学者による評論を基に形成され、かつ『西鶴置土産』の代表話として挙げられてきた巻一の一、巻二の二など数話の解釈によって成立していることを確認し、従来の代表話が一話全体の把握ではなく、没落した大臣の愁嘆場など、話の断片的な要素を拡大して解釈する傾向にあった点に疑義を呈して、対する『西鶴置土産』の「笑い」の側面に改めて着目したものである。

さらに第二章『西鶴置土産』における「笑い」、そして「俗」では、従来は注目されることのなかった『西鶴置土産』の非代表作を取り上げ、その表現と内容に遊女評判記との類似性が見られることを指摘し、巻一の二、一の三などの作品内容における評判記よりの叙述の働きを論じることで、前章の「笑い」の要素とともに『西鶴置土産』を理解するうえで加味されるべき側面であることを提示するものである。このような『西鶴置土産』における「笑い」の問題は、長く成立論が主要な課題とみなされ、作品内容の議論が等閑視されてきた『万の文反古』の作品理解にも共通して指摘することができる。

『万の文反古』のB系列は、書簡という形式を採ることで、手紙の書き手が自らの苦悩を告白し、自我の発露を表現した秀作になり得たものとして、その作品内容が高く評価されてきた章群である。本論考では第三章『万

の文反古』B系列の矛盾と笑い」において、こうした従来の解釈が近代における書簡体小説の意義に照応させて導かれたものと考え、巻一の一「世帯の大事は正月仕舞」を採り上げて、『文反古』全般に使われる「尽くし」の趣向が、一話のうちで書き手の人物像や書簡の内容を具体化するための重要な表現として使われており、書き手の人物像が、従来の解釈とは対照的に「笑い」の対象として読者に提示されている点を考察している。同様の傾向は『文反古』巻五の三「お恨みを伝へまいらせ候」、巻一の三「百三十里の所を拾ひの無心」といった、『文反古』のB系列を代表する他の話にも共通して指摘できるものであり、『万の文反古』という作品集の位置付けを決定するうえで看過できない点であることを論じた。

さらに第四章『万の文反古』巻一の四における書簡と話』では、B系列に属する巻一の四「来る十九日の栄耀献立」の料理献立部分の記述に考証を加え、これが従来考えられてきたような、接待の場に豪勢な献立を用意させるよう強要する内容ではなく、反対に簡素な内容へと改めるための指示が下された、茶懐石の献立であると結論付けた。この茶懐石の献立は、巻一の四の書簡全体の中で、豪勢な接待を拒否しようとする書簡の書き手の意図を示すものであり、料理献立以外の書簡中の記述にも、このメッセージは一貫して含意されているのである。さらに本論考は、このとき書き手が接待を拒否する理由を、巻一の四評文と当時の経済状況その他を考証したうえで、書き手側が受取り手への資金融資を断るためと推定した。書き手側は豪勢な接待の提案を却下することで、融資の申し出を暗に断りながら、同時にあるべき商人の姿を訓示しているのである。従来、事務的な用件を羅列した目録として読まれ、文学的趣向の乏しい話とされてきた巻一の四の書簡は、書き手と受取り手の間に交わされた、経済の駆け引きと、それに伴う人心の機微を描く、一つの「話」として成立し得ているのである。

西鶴の遺稿集研究は、成立論に関する議論が活発に行われてきた一方で、作品内容の理解という点では考究が最も立ち遅れている領野である。それは作品内容を検討するとき、「西鶴」という作者の人物像がまず想定され、そのうえで個々の話の中の人物像にかなった要素のみが取捨選択されて解釈されてきたという、従来の西鶴研究



における方法論の問題点が色濃く残されているためであった。遺稿作品における「笑い」の要素が長く等閑視されてきたのは、『西鶴置土産』や『万の文反古』が、西鶴の到達した「晩年の境地」を体現する作品集として位置づけられてきたことと無関係ではないのである。西鶴研究は「西鶴の創作意識」を基軸として作品内容を理解する従来の方法から、個々の作品内容の表現面を吟味し、話の文脈を汲みながら作品内における物語上の意味を理解する作品論の方法へと移行されなければならないだろう。